秋の歌

寺田寅彦

チャイコフスキーの「秋の歌」という小曲がある。私はジンバリストの演奏したこの曲のレコードを持っている。そして、折にふれて、これを取り出して、独り静かにこの曲の呼び出す幻想の世界にわけ入る。

北欧の、果てもなき平野の奥に、白樺の森がある。歎くように垂れた木々の梢は、もう黄金色に色づいている。傾く夕日の空から、淋しい風が吹き渡ると、落葉が、美しい美しい涙のようにふり注ぐ。

私は、森の中を縫う、荒れ果てた小径(こみち)を、あてもなく彷徨(さまよ)い歩く。私と並んで、マリアナ・ミハイロウナが歩いている。

二人は黙って歩いている。しかし、二人の胸の中に行(ゆ)き交(か)う想いは、ヴァイオリンの音になって、高く低く聞こえている。その音は、あらゆる人の世の言葉にも増して、遣(や)る瀬(せ)ない悲しみを現わしたものである。私がＧの絃で話せば、マリアナはＥの絃で答える。絃の音が、断えては続き続いては消える時に、二人は立止まる。そして、じっと眼を見交(みか)わす。二人の眼には、露の玉が光っている。

二人はまた歩き出す。絃の音は、前よりも高くふるえて、やがて咽(むせ)ぶように落ち入る。

ヴァイオリンの音の、起伏するのを受けて、山彦の

答えるように、かすかな、セロのような音が響いて来る。それが消えて行くのを、追い縋りでもするように、またヴァイオリンの高音が響いて来る。

　このかすかな伴奏の音が、別れた後の、未来に残る二人の想いの反響である。これが限りなく果敢(はか)なく、淋しい。

「あかあかとつれない秋の日」が、野の果に沈んで行く。二人は、森のはずれに立って、云い合わせたように、遠い寺の塔に輝く最後の閃光を見詰める。

　一度乾いていた涙が、また止め度(とど)もなく流れる。しかし、それはもう悲しみの涙ではなくて、永久に魂に

喰い入る、淋しい淋しいあきらめの涙である。
夜が迫って来る。マリアナの姿はもう見えない。私は、ただ一人淋しく、森のはずれの切株に腰をかけて、かすかな空の微光の中に消えて行く絃の音の名残を追うている。
気がつくと、曲は終っている。そして、膝にのせた手のさきから、燃え尽した巻煙草の灰がほとりと落ちて、緑のカーペットに砕ける。

（大正十一年九月『渋柿』）

底本：「寺田寅彦全集　第一巻」岩波書店
１９９６（平成８）年12月5日発行
入力：Nana ohbe
校正：佳代子
２００３年12月14日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。